

5 課

4月30日

すべての民族とバベル



安息日午後 4月23日

暗唱聖句

こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。（創世記 11：9、新共同訳）

これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼らを全地のおもてに散らされた。（創世記 11：9、口語訳）

今週の聖句

創世記 9：18～11：9、ルカ 10：1、マタイ 1：1～17、ルカ 1：26～33、詩編 139：7～12、創世記 1：28、創世記 9：1

今週のテーマ

洪水の後、聖書の記述はその焦点を、ノア1人から彼の3人の息子たち、「セム、ハム、ヤフェト」へと移します。中でも、カナン之父となるハム（創10：6、15）に特別の注意が向けられます。約束の地「カナン」（同12：5）の名はこのカナンに由来します。地上のすべての民族は彼によって祝福されると約束されたアブラハム（同12：3）も、この地に入るのを待ち望んだのでした。

しかしながら、その道筋はバベルの塔によって断たれます（創11：1～9）。神の計画は再び人間によって妨げられます。すべての民族の誕生という祝福となるはずであったことが、別の呪いの機会ともなってしまうのです。民は一つとなって神の地位に昇ろうとします。神は裁きをもって彼らに応えます。そして、混乱という結果を通して人々は全地に散らされます。こうして、「地に満ちよ」（同9：1）との神の当初の計画が成就されるのでした。

人間の邪悪さにもかかわらず、神は悪を良いものに変えることができになります。神はいつもそうであるように、「最後の一手」をお持ちなのです。父の天幕でハムがしたこと（創9：21、22）による呪い、そしてバベルの塔で混乱させられた民は（同11：9）、最終的にはすべての民族の祝福に変えられます。

問1 創世記9：18～27を読んでください。この奇妙な物語の意味することは何でしょうか。

ノアのぶどう畑での行動は、アダムのエデンの園での行動を思い起こさせます。この二つの物語には共通の主題があります。善悪の木の実を食べたアダムはその結果、裸であることを知り、それを隠し、呪いを受け、そして祝福へと続きます。ノアは彼の父祖アダムの過ちを再びたどり、不幸にも失敗の歴史を繰り返します。

果実の発酵は神の創造には含まれていませんでした。ノアは泥酔し、自制心を失い、そして裸になります。ハムが父の裸を「見た」ことは、エバが禁じられていた木を「見た」こと（創3：6）を暗示しています。これらの並列構造は、ハムが父の裸を、ただ偶然にこっそりと「見た」のではないことを意味します。彼は、そのような状態の父に服をかけようともせず、そのままにし、それを言いふらします。対照的に、彼の兄弟たちはすぐに父に着物をかける行動を取ります。この行為は暗にハムを非難するものです。

ここに起きた問題は、単に親を敬う以上のことを含んでいます。あなたの過去を代表する親を敬わないことは、あなたの将来に影響を及ぼします（出20：12をエフェ6：2と比較）。このように、この呪いはハムの将来、すなわち彼の息子カナンにまで影響を与えることになるのです。

もちろん、この聖書の箇所を人種差別的な論理を正当化するために用いることは、神学のはなはだしい誤用であり倫理的犯罪です。この預言はハムの息子、カナンにのみ限定されるものです。聖書記者はカナン人の墮落したふるまいを念頭に置いた記述をしています（創19：5～7、31～35）。

この呪いは、「カナン」という名に関わる祝福の約束をも含んでいることを付け加える必要があります。「カナン」は、「征服」を意味するヘブライ語の動詞「カーナー」に由来します。セムの子孫である神の民がカナンを征服することによって、「約束の地」に入り、メシア到来の道を備え、「セムの天幕に住まわせ」、ヤフェトの土地を広げるのでした（創9：27）。これは神の契約がすべての民族に及ぶことの預言的引喩です（ダニ9：27、イザ66：18～20、ロマ11：25）。ハムの呪いはこうして実際に、すべての民族の祝福となり、その祝福、すなわち主によって与えられる救いは、ハムとカナンの子孫をも含む祝福なのです。

洪水の「ヒーロー」であるノアが泥酔したのでしょうか。この事実は、私たちはみな、いかに欠点の多いものであり、そして私たちはなぜ、人生の中で神の恵みが絶えず必要であるかを語っています。

ノアの時代の年代記的情報は、ノアが洪水前と洪水後の文明をつなぐ存在であることを理解する助けとなります。前述の物語の最後の2節（創9：28、29）は、私たちをアダムの系図の最後の部分へと連れ戻します（同5：32）。ノアの父であるレメクが56歳のときにアダムは死んだので、ノアはアダムの物語を聞いていたはずで、そしてノアはそれを洪水前と後の彼の子孫たちに伝え聞かせたはずで、

問2 創世記10章を読んでください。ここにある系図の目的は何でしょうか（ルカ3：23～38も参照）。

聖書の系図には三つの目的があります。第一は聖書の出来事の歴史性を強調することであり、そのためには、その時代に生まれ、死んだ実在の人々の正確な生きた年数が必要になります。第二に、古代から聖書記者の時代までの連続性を示し、過去と「現在」を明確に関連づけるためのものです。第三は、人間のはかなさと罪の呪いの悲劇的な影響、それがすべての世代に致命的な結果をもたらしていることを思い起こさせるためです。

「ハム人」「セム人」「ヤフェト人」の分別は明確な基準によるものではないことに注意してください。70部族は、70人のヤコブの家族と（創46：27）荒野でのイスラエルの70人の長老（出24：9）を予表しています。70部族と70人の長老の間的一致はすべての民族に対するイスラエルの使命を意味しています。「いと高き神が国々に嗣業の土地を分け／人の子らを割りふられたとき／神の子らの数に従い／国々の境を設けられた」（申32：8）。同様に、イエスは伝道のために70人の弟子を遣わしています（ルカ10：1）。

この情報が私たちに示しているのは、アダムと父祖たちとの直接的なつながりです。彼らはすべて歴史上の人物であり、アダム以来の実在の人々です。この事実は、父祖たちがこれらの古代の出来事を個人的に記憶していた証人に直接会っていたことを知る助けとなります。

マタイ1：1～17を読んでください。この系図は、ここにあるすべての人々が見な、歴史上の人々であったことについて、私たちに何を語りますか。彼らが見な歴史上の人物であったことを知り、そう信じることは、私たちの信仰にとってなぜ重要なのでしょう。

問3 創世記 11：1～4 を読んでください。「世界中」の人々は、なぜ一致団結することに懸命だったのでしょうか。

「世界中」という表現は、洪水の後のまだ少なかった人々のことを意味します。人々が集まった理由は明らかで、彼らは天に届く塔を建てようとしたのです（創11：4）。事実、彼らの実際の意図は、創造主なる神に代わろうとすることでした。この時の人々の意図と行為の描写が、創造の時の神のそれと重複することは重要な意味を含んでいます。「彼らは……言った」（創11：3、4を同1：6、9、14と比較）、と「作って」（創11：3、4を同1：26と比較）です。さらに彼らは「われわれは名を上げて」（創11：4、口語訳）と言います。ここに彼らの意図がはっきり示されています。これは神に対してのみ用いられる表現です（イザ63：12、14、口語訳）。

つまり、バベルの塔を建てようとした者たちは、創造主なる神に代わろうとする誤った野心をいだいたのです（私たちはだれがこの考えを吹き込んだかを知っています。イザ14：14参照）。彼らの企てのために、洪水の記憶がある役割を果たしていたことは間違いありません。彼らは、神の約束があったにもかかわらず、再び洪水が起きた場合に生き残るために高い塔を建てます。洪水の記憶は、歪められながらもバビロンの伝承の中にも残っており、それはバベルの町（バビロン）の建設と結びついています。天に届き、神に代わろうとするこの試みは、端的にバビロンの精神を表しています。

そのようなわけで、バベルの塔の物語は、ダニエル書の中でも重要な主題となるのです。バベルの塔の物語に出てくるシナル（シナル）の地は（創11：2）、ネブカドネツアルがエルサレムの神殿の祭具類を運び込んだ場所として、ダニエル書の初めに再度出てきます（ダニ1：2）。ダニエル書の他の多くのエピソードの中で、ネブカドネツアルが金の像を建てる場所として選んだのも、おそらく同じ「平野」であり、それは彼の価値観を最もよく示す事例と言えるでしょう。ダニエルは、終わりの時についての幻の中で、同じように神に逆らって一つに結集する地上の諸国のシナリオを見ています（ダニ2：43、同11：43～45を黙16：14～16と比較）。しかし、バベルのとくと同じように、ここでもその企ては失敗します。

20世紀の有名なフランスの作家が、人間の最も大きな挑戦は、「神のようになること」であると言いました。エデンでのエバに始まったこの危険な偽りに引き込まもうとする誘惑（創3：5）は、今の私たちにとっては何でしょうか。

問4 創世記 11：5～7 と詩編 139：7～12 を読んでください。神はなぜ地上に降って来られたのでしょうか。何が神を動かしたのでしょうか。

皮肉にも、人が天に上ろうとしたのに、神が彼らの所に降って来られたのでした。神の降下は、神が至高のお方であることの証拠です。神は常に、私たち人間の手の届かない所におられます。神の所に上ろうとするいかなる人間の努力も、天におられる神に会おうとするいかなる試みも役に立たず、愚かなことです。だからこそ、私たちを救うためにイエスは私たちのいる地上に降られたのです。それ以外には、私たちを救う道はなかったのです。

バベルの塔の物語の大きな不思議は、「人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て」（創11：5）との神の言葉です。神は見るために降る必要はありません（詩編139：7～9を同2：4と比較）。しかし、神はとにかくそのようにされます。それは、神の人との関わりを強調するためです。

問5 ルカ 1：26～33 のイエスの降誕の記述には、どんな意味があるでしょうか。

神の降下は、私たちに、信仰による義の原則と神の恵みの過程を思い起こさせます。私たちが神のためにどんな働きをしようとも、なお、神は私たちに会うために、降らねばならないのです。私たちを神に引き寄せ、贖うのは、私たちが神のためにすることによるものではありません。そうではなく、神が私たちのいる所に降られることが私たちを救うのです。事実、創世記は二度にわたって神が「降って」と述べています。それは、どれほど神が地上の出来事に關心を払っておられるかを物語っています。

この聖句によれば、主は彼らの根深い一致した企てを終わらせたいと望まれます。彼らの墮落した状態は、ますます彼らを悪へと突き進ませるだけだからです。そこで神は、彼らの言葉を混乱させることをお選びになりました。そうすれば、彼らの一致した企ては終わるからです。

「バベルの建設者の企ては、恥と失敗に終わった。彼らの誇りの記念碑は、その愚かさの記念碑となった。それでも人々は、同じ道をたどり続けて、自己に頼り、神の律法を拒否している。これは、サタンが天で実行しようとした原則であった。カインが捧げ物を捧げたときの精神もこれと同じであった」（『希望への光』59ページ、『人類のあけぼの』上巻118、119ページ）。

バベルの塔の物語から、どのような人間の傲慢とその結果を見ますか。この物語から個人的にどんな教訓を学ぶことができますか。

問6 創世記11:8、9と創世記9:1を創世記1:28と比較してください。
神の離散の計画はなぜ贖罪を目的としているのでしょうか。

神の計画と人に対する祝福は、彼らが「増え……、地に満ち」ることでした(創9:1を同1:28と比較)。神の計画に反して、バベルの建設者たちは同じ民同士でくっ付いていることを好みました。彼らが言うところの、町を建てた理由の一つは、「全地に散らされることのないようにしよう」(同11:4)というものでした。彼らが他の土地へ移ることを拒んだのは、おそらく、離れて、散っているよりも、一緒にいるほうがより強くなれると考えたからでしょう。それはある意味正しかったのです。

不幸なことに、彼らは一致の力を良いことのために、悪いことのために用いようとしていました。彼らは自分たちの傲慢と誇りのために「名を上げ」ることを望みました。人が公然と神に反抗して、自分たちの名を上げようとするときには、それがうまく行くことは決してありません。

そこで、彼らのあからさまな反抗に対する裁きとして、神は彼らを「全地に散らされ」ました(創11:9)。それはまさに、彼らが望まないことでした。

興味深いことに、「神の門」を意味するバベルという名は、ヘブライ語で「混乱」を意味する動詞「バラール」に関連しています(創11:9)。それは彼らが「神の門」に届くことを望み、自分たちは神であると考えたからです。その結果、彼らは混乱に陥り、以前よりもはるかに力のない者となりました。

「バベルの人々は、神から独立した政府を設立しようと考えていた。その中には、神を恐れる人もいくらかあったが、不信の人々の主張に欺かれて、その企てに引き入れられていた。主は、こうした忠実な人々のために、刑罰をのばし、人々の正体が明らかになるように時間をお与えになった。これが行われている間、神の子らは彼らに思いとどまらせるように働きかけた。しかし、人々は、一致団結して天に反逆を企てた。もし彼らが止められずに進んでいったならば、彼らは、黎明期の世界を墮落させてしまったことであろう。彼らの連合は、反逆に基づいていた。それは、自己賞揚の王国であって、神には主権も栄誉も与えられないところである」(『希望への光』59ページ、『人類のあけぼの』上巻118ページ)。

私たちはなぜ、自分のために「名を上げる」ことを求めることに、細心の注意を払わなければならないのでしょうか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第10章「バベルの塔」を読んでください。

「彼らは、ここに都市を建設し、世界の驚異となるような巨大な高塔を建てることにした。この企ては、人々が広く離散して住むことを防ぐために考案された。神は、人間が、広く地球上にわかれて住み、地に満ち、地を従わせるように指示されていた。しかし、バベルの建設者たちは、彼らの社会を1つの組織にし、やがて、全世界を含むに至る帝国を築こうとした。こうして、彼らの都市は、世界帝国の首都となるのであった。その栄光は、世界の人々の賞賛と尊敬をかちえて、建設者の名を有名にするのであった。空高くそびえる壮麗な塔は、建設者の能力と知恵の記念碑として建てられ、彼らの名声を永久に後世の人々に伝えるためであった。

シナルの平原の住民は、この地上に再び洪水を起こさないという神の契約を信じなかった。彼らのなかには、神の存在を否定し、洪水は自然的原因によって起こったとする者が多かった。他の者は至高者を信じ、神が洪水前の世界を滅ぼしたことを信じていた。しかし、彼らの心は、カインと同様に神に反抗的であった。彼らが塔を建てた目的の1つは、もし再び洪水が起こったならば、彼らの身の安全を確保するためであった。彼らは、その建造物を、水が達したところよりもはるかに高く築き上げて、どんな危険にも耐えられるようにしようと思った。そして、雲のある層にまで登れるから、洪水の原因をつきとめることもできるだろうと彼らは考えた。この企てのすべては、計画者たちの誇りをさらに高め、後世の人々の心を神から引き離し、偶像礼拝に陥れようとするものであった」（『希望への光』58ページ、『人類のあけぼの』上巻114、116ページ）。

話し合いのための質問

- ① 私たちは歴史の中に、あるいは現在において、自分の名を上げようとしたために問題を引き起こしたどんな実例を見ることができるでしょうか。
- ② 私たちは教会として、たとえそれが無意識の行為であっても、どうすれば自分たちのバベルの塔を建てようとする危険を避けることができるでしょうか。